

桑川麻里生 (慶応大学)

日本人はどうゲーテを読んできたか - 比較文化的考察

「グローバル化」ということが盛んに語られる今日、過去 150 年の日独交流史の中から重要な知的達成を見出そうとするなら、日本における近代ドイツ文学の受容史、とりわけゲーテの文業が日本においてどのように受け止められてきたかは、重要な着眼点のひとつになるに違いない。ひとつの「文明」の姿全体が、もうひとつのまったく別の文明によって、どのように受容されていったかを見てゆくことになるからだ。

18 世紀から 19 世紀にかけてドイツ語圏で生み出された文学的テキスト群は、単に詩や小説、戯曲、批評文といった文芸作品であるにとどまらず、近代という大きな文明の潮流がどのように言語化されるかという根本的な実験であった。とりわけゲーテの仕事は、あきらかに西欧近代から生まれたものでありながら、それを乗り越えようとするモチーフを多分に孕んでいた。ゲーテの手になるテキストは、近代的な知と感受性に対していくつもの疑問符を突きつけるものでもあり、より普遍的な学知と世界観を探求する努力でもあった。そして、そういうテキストを日本の読者は、時に自らをヨーロッパ的文脈に近づける努力をしながら、またある時は東洋人としての感覚と思想的文脈において、その深く広い含意を読み解くことを試みてきた。現在、単純にヨーロッパ的でもなければ、単純に東アジア的でもない、キリスト教的でもなければ、仏教的でも儒教、道教的でもない、よりグローバルな文脈における世界観、人間観および文明観の探求が必要であるとするなら、それは抽象化された「人間」や「世界」の概念からではなく（それはむしろ「西欧近代」の方法であろう）、具体的な異文化間交流の歴史を考えることによってはじめて端緒につくものではないか、とりわけ、ゲーテという西欧近代の完成者にしてその克服に挑んだ存在を、日本人がさまざまなコンテクストの中で受け止めようとした有様を歴史的に振り返ることは十分に意義のあることではないかと考えるものである。

今回の機会では、特に仏教的コンテクストにおいてゲーテを解釈しようとした日本人たちの仕事にも言及しつつ、日本におけるゲーテ受容に関して比較文化的な考察を試みたい。そもそも日本人は、ゲーテを、その受容の当初から「小説家」や「劇作家」というよりはむしろ「偉人」であり、「人生の奥義を見極めた大家」として受け止めてきた。第二次大戦中、「命を落とすかもしれない」という切羽詰った意識のもとで南方戦線に出征して行った若者たちのポケットに非常にしばしば入っていた冊子が『ゲーテとの対話』であったことにも、彼らがゲーテに「生死を超えた巨人的境地」を求めていたことが窺えよう。彼らはゲーテに何を見出していたのだろうか、あるいは見出そうとしていたのだろうか。それを考えながら、日本独特の「ゲーテ受容史」についてあらためて考えてみたい。

桑川麻里生 (くめかわ・まりお)

1962 年栃木県生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後、スポーツ雑誌編集記者を経て、2004 年より慶應義塾大学文学部助教授、2007 年同大学教授、2011 年より同大学アート・センター副所長。共編著に『サッカーのエスノグラフィーへ』、共著に『Querpässe. Beiträge zur Kultur-, Literatur- und Mediengeschichte des Fußball (斜めパス：サッカーの文化・

2011 獨協国際フォーラム

文学・メディア史論集)“など、翻訳にトーマス・ブルスイヒ『ピッチサイドの男』がある。主な研究領域：近現代ドイツ文学（特に 20 世紀の文学者に対するゲーテの影響）、スポーツ文芸、スポーツ文化史など。